

第七講 一九八一年二月二十五日「師-真理-性」他

ミシェル・フーコー講義集成<10>「主体性と真理」(コレージュ・ド・フランス講義 1980-81) ミシェル・フーコー著 清水 雄大・坂本 尚志訳 筑摩書房 (2004 年)

担当 ぱんこ

- キリスト教に先立つ 2 世紀の哲学者たちのテキスト
- 生の師たち、行動の教導者たち、生存の教導者あるいは師たち

前回までのあらすじ (p.169-170)

- これらの生の師たちの多くはストア派だったが、彼らが**結婚の価値を認めていた**ということ
 - 彼らが結婚を生の一般的規則として、一般の人々や市民の大部分はもちろん、哲学者に対してさえも適用されるべき規則として提示していた
 - 結婚のこの一般的規則を、非常に特殊で特別な関係の型を含むものとして提示し、また分析した
 - 婚姻関係は自然の秩序において特別な何ものである
 - 友愛という社会的関係においても特別である
 - 結婚は 2 人の存在の融合による特殊な現実を形づくり、創造し、出現させ、生起させると考えられている限りにおいて特別……“クラシス”

今回の主眼……性的快楽の婚姻中心化の分析 (p.170)

- これから、(前回と) 同じ種類のテキストを取り上げる
 - 【目的】 性的快楽の新たなエコノミー、アフロディシアの新たなエコノミーを分析する
 - 【概要】 性的快楽。アフロディシアに対する、用心深く、慎ましく、節約思考で、制限的になっていく態度が一方で見られる
 - 【方法】 **2 つの形式による性的快楽の婚姻中心化**、アフロディシアの婚姻中心化
 - 一方では、アフロディシア、合法的な性行為が、婚姻制度の内部へ局地化され、さらに夫婦 2 人の個人的関係の内部へと局地化される
 - 他方で、これらの性行為がコード化し、結婚の法的あるいは制度的形式に従うだけでなく、個人的関係それ自体に従ってなされる
- 結果、合法的な性的快楽が婚姻関係という特殊な形式に紐づけられる
= 性的活動の省察、分析、規則化の歴史に重要な契機がある

第一の形式 (p.170)

- 性的快楽の、アフロディシアの新たなエコノミーにおいて、性的快楽に対する新たな不信の形式 (※キリスト教に先立つ数世紀前の話)
- アフロディシアのこの制限的エコノミーがギリシアにおいてどのように現れ、組織されていたのかを知ること
 1. 宗教実践において
 2. 哲学的実践と生において
 3. 医学において

宗教の実践との関係 (p.170-173)

- 古代ギリシアにおいて知られていた、儀式の禁忌、礼拝の禁忌
- この禁忌は、性的活動と宗教的生活のあいだに比較的厳格な障壁、限界、境界を作り出そうとしてきた
 - 女神信仰が前提としていた処女性の義務
 - 神への奉仕が前提としていた長期間の節制の義務
- 神々への関係は、聖行為に対する根本的な切断が行われることを前提としている
 1. アフロディシアが死と死体といわば対称的な位置にある
 - 2つの禁忌 = 性行為・死体との接触
 - 自分自身を清めるとは、死体とアフロディシアとのあらゆる接触を洗い流すということ
 2. 宗教の次元における真理語りは、顕著で、継続的かつ決定的な性的節制を通じて行われる
 - 神からくる真理は、人間がいかなる性的関係も持たないという条件においてのみ人間のところにやってくることができる

<宗教的観点>

- アフロディシアは、死との近縁関係・対称関係にある
- アフロディシアは、真理の顕現とは両立不可能である

哲学的実践と生との関係 (p.173-175)

- 古代ギリシアにおける哲学的伝統＝ピオス・テオーレーティコス、観想的生
 - 性的快楽は観想的生とは両立不可能なもの、危険なものとして現れる
 - 観想的生＝真理の探究、把握、観想に没頭し、専心する生のこと
 - ピタゴラス派…「いつ性交すべきか？」→「自分を弱らせたいと望んだ時」
 - ギリシアのあらゆる哲学者における哲学的生は、性的快楽に対する制限という態度、不信という態度を含んでいる
 - もちろん、これらの態度や実践的な帰結は異なっている
- ※ここで取り上げられる性的関係は、愛や欲望とは結び付かず、いかなる動揺も起こさない。あくまでも自然である欲求を充足する快楽でしかない。

< 哲学的实践 >

- ・ アフロディシアは、観想的生とは両立不可能なものである
- ・ 哲学的実践は、性的快楽に対し非常に制限的な態度をとる

- なぜ哲学者たちから不信を集めたのか？
 1. 性的快楽は暴力的な快楽であり、身体全体を支配し、揺さぶり、望んでいないものまで引きずり出されてしまうから
 2. 性的快楽は不安定な快楽であり、一瞬は強烈だが、そのあとは疲労、憔悴、悲しみ、後悔へ逆転するから
 3. 性的快楽という絶頂の暴力と愛の盲目は、真理の把握を妨げることしかないから
- 観想的生 = 余暇の生である ←対立→ 政治的生
- 観想的生 = エンクライア（統御）の生である ←対立→ 快楽の生

医学的視点 (p.175-177)

- ヒポクラテス『生殖について』
 - 性行為とは、性器の摩擦が熱を引き起こすことである
 - 性器自体の熱が、性器の周りの液体と体液に伝わることで、泡を生じ、快楽を引き起こす
- 重要なのは、この快楽の仕組みにおいて、身体全体に影響が及んでいるということ
- 一方で、精液の泡は、ヒポクラテスが最も豊かで、活力があり、強い部分であると述べている部分が作り出す限りにおいてであること
- つまり、性行為においては、身体はより活力があり強いものを失う
 - …身体は自分自身を複製し、そこからその存在の最も本質的な諸原理が引き剥がされる
 - = 精液が異なる胎児を作り出す
 - = 射精によってしたい全体が疲弊する
 - = 個人は自らが経験する快楽によって、ほとんど自身の死の境へと運ばれる

性行為とてんかんの関連付け (p.177-179)

- てんかんは激しく不随意的な運動からなっていること
- てんかんは意識の消失、思考の鈍化、記憶の消失、忘却を含んでいること
- てんかんは身体の完全な消耗を招き、発作後はその人が死んでしまったと信じかねないほどであること

<宗教的禁忌、哲学的思考における性行為の特徴との結びつき>

- (1) 性行為は、その本性からして死と非常に近しく、それを死に結びつける何かが存在しているということ
- (2) 性行為は思考と両立不可能であり、記憶と両立不可能であり、真理との関係との両立不可能であるということ

→古代ギリシアにおける、セクシュアリティに対する根本的な不信の態度

この整理から言いたかったこと (p.179)

- ① これはユダヤ＝キリスト教が起源ではないということ
- ② 医学においても、哲学においても、宗教においても、**性—死—真理の一種の三角形**がまさに現れていること

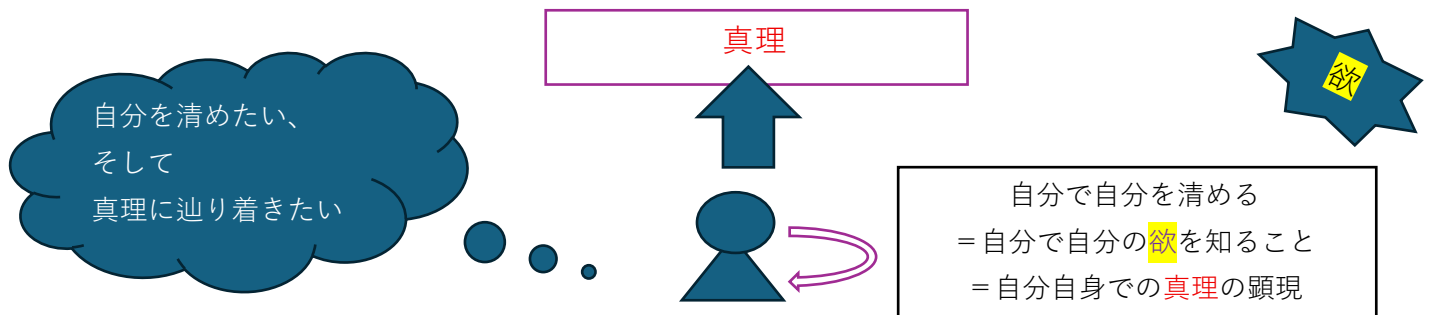
ギリシアのアフロディシアと、キリストの肉の経験の、根本的な差異とは (p.179-180)

- たしかに、キリスト教の肉の経験にも性—死—真理の一種の三角形がある
←→これらは同一ではない
- **根本的な差異；真理への関係が変化したこと**

古代ギリシア	性的活動（アフロディシア）は、 一時的に個人が真理へと接近することを不可能にする
キリスト教	• 性的関係が真理への接近から排除されており、結果として性行為に関するあらゆるものから身を清めなければならない ↓ • 真理へと接近するために必要な清めは、各人が自分自身のうちにある種の真理関係を打ち立てることを前提としている • この真理関係によって、ある性的欲望が、セクシュアリティへのある関係が、性に関するすべてのものとの関係が秘密裏に存在していることを明らかにするもの全てが、各々のうちに発見される

- キリスト教において、真理へと接近するために、自身を清めたいならば、自分というものに対する特殊な真理関係（主体は自分が何者か（＝性的欲望）を知らなければならない）を打ち立てなければならない

- 私自身の中での真理の顕現、私が自分自身によって自分自身のために、自分自身の中で行う真理の顕現、それによってこそ、私は真理への接近を妨げてきた性的欲望との繋がりに解放される



性的関係と真理の間の両立不可能性の二重化（p.180-181）

- キリスト教の肉の経験では、性交いや性的欲望が真理と両立不可能であることを断言することはもはや問題ではない
- 技術的には、自分の欲望自体の真理を自分自身の中に認めるための手段を見出さねばならない
- その後、快楽と性的欲望に対する私のあらゆるこだわりの消失によって、私に約束された真理へと接近が可能になる

真理への根本的な問い

「私の肉欲の真理とはどのようなものか。」

「私の欲望の真理とはどのようなものか。」

<真理の二重化>

- 古代ギリシアの時代
真理へ到達するためには、性行為（欲望）は節制すべきものだ
↓
- キリスト教の時代
真理へ到達するためには、性行為（欲望）は節制すべきものだ
そのためには、**あらかじめ自分で**真理とは何かを問い、答えなければならない

性的関係の婚姻中心化の問題 (p.183-187)

その1 結婚関係においてのみ、性的関係が許容される

- アルテミドロス『夢判断の書』
性行為がそのあとう限り最良の形式と最大の価値を持つのは、それが結婚において生じるとき
- 1～2 世紀
正当な性行為は結婚の中にしか存在しない
 - ムソニウス・ルフス「あらゆる婚外の性的関係は、相手がどのようなものであろうとも、それが結婚の中で行われていないという理由で非難されるだろう」

その2 姦通における、男性と女性両方への同じ程度の批判

- 古代の考え方
女性の姦通は不道德だが、男性の姦通は、快楽のエコノミーを作り出す法的・社会的構造に適するので、不道德ではない
- 性的関係の新たな枠組みを打ち立てようとするテキスト群
 - ムソニウス・ルフス「夫の姦通は女性のそれに対して対照的に非難すべきであると考えられていた」
 - 男性の姦通も女性の姦通と同じ理由で非難すべきである
 - 夫が妻に認めないのならば、夫は自分自身にも認めることができない
- 男性と女性の間に、法的なだけでなく、**道徳的な平等**を打ち立てている
- 男性の快楽は女性の快楽と同じ型のものであり、互いに本性の違いは存在しない
 - 男性のレベルへの、女性の一種の法的、法的・道徳的上昇
 - 男性の快楽の、女性の快楽のレベルへの下降
- よって、婚外での性的関係が禁止されているという意味において、婚姻中心化が起きている

<性的関係の婚姻中心化>

- ・ 正当な性行為が婚姻関係のうちにしか存在しなくなる
 - ・ さらに、男女どちらも同様に、姦通が不道德とされる
- 結婚以外での性行為が認められなくなる

性行為のコード化 (p.187-191)

- 性行為は、結婚の中で行われるだけでなく、ある特定のやり方によって、いくつかの特定の用心を怠らず、いくつかの特定の規則・規範に従いつつ、行われねばならない
- 1. 結婚における性行為は快楽に結び付けられてはならない
 - 快楽は目的ではなくなる
 - 愛人との性的関係と、妻との性的関係には、根本的な差異がある
 - 子供を作るという目的の喚起
 - 結婚をするのは、子供を作るためだ
 - 結婚の目的と、性交の目的の重ね合わせ
 - 愛情の結びつき
 - 性行為によって、夫と妻の間の情愛の結びつきを形成し、発展させるべきものである
 - 快楽の瞬間によって、婚姻による結合の現実的内容を構成することになる諸関係の綱の目全体（敬意・好意・情愛・信頼）を作り出すに至らなければならない
 - ソロンの法「夫と妻は月に3回性的関係を持つべき」
→夫と妻を結びつけている情愛を定期的に鍛え直し、新たな力を与えなければならないから
 - 性的快楽は、ストア派によって根底からかき消されるか、純粋な道具として、純然たる中継地点として、子供の出産、子孫、夫婦間のつながりの構築、再構築、再活性化という目的に従属している
- 妻との性的関係を持たねばならない際の方法についての、指示の総体
 - 羞恥の規則…妻がチュニクを脱ぎ去る時、彼女はすぐさま自身の羞恥心というチュニクを纏わなければならない
 - 屋間に性交してはならない…妻の身体のイメージが夫の精神と記憶に刻み込まれるから
 - 夫の欲望の扱い方…主導権を握るのは夫であり、妻はつっけんどんな態度を取ってはいけない
- この10～12世紀後に、私たちはキリスト教の決擬論において男性と女性の婚姻関係のコード化という巨大な建造物を持つことになるが、これは別物である
- 一方、一連の忠告がすでに存在している
 - 夫婦の性的関係が、愛情関係、エロスの関係であるべき、より一般的な関係の表出、要素、一部となる
 - エロスはギリシアにおいて、単に欲望の対象だった
 - 今や、結婚の中に合法的な場所を持つ必要がある…結婚のエロス化
 - 性的関係の内容や行為、身振り、態度、感情の全体が、分析対象、考察対象、コード化の対象となる

- 性的関係の婚姻中心化は、配偶者間の性的関係を、道徳と同時に真理との関係で分析することで初めて導くことになる
 - これらの諸関係がどのようなものであり、あるべきかについての真理の問いは、この時から始まる
※古代のアフロディシアの考えでは、性的関係があるところには真理の関係は存在し得なかった
- 性行為は、哲学的思想の鍛錬と一層両立可能になるのではなく、哲学にとっての分析対象に、真理の言説にとっての分析対象になり始める
 - 真理／性行為の両立不可能性は、この性的活動あるいは哲学的活動を行う主体のレベルでは維持される
 - 一方で、分析すべき対象の諸領域の次元では、性行為はその本性自体において、正当化されるためにそうであるべきものにおいて、認識の対象、真理の対象となり始める
 - こうして、結婚の婚姻中心化に、キリスト教思想において大きな問いとなるもの「我々の欲望とは本当のところはどのようなものなのか」という初期の萌芽を見出すことができる

コメント

- 真理の二重化について。究極の真理を知るために、私の真理をまず知る必要がある、という二重化と読んだ。
- 性行為という限定的な行為を議論しつつ、広く欲や欲望についても同様の構造があることが少し示され（むしろ、そのわかりやすい例として性行為が取り上げられていたということ）、これまでの議論の位置付けが見えやすくなったと思った。
- 真理に対置するもの、あるいは邪魔をするものとして、性行為、欲望が位置付けられていると読んだ。相容れない、交わらないはずの真理／性行為が、二重化を目前に性行為が真理にとっての分析対象となることで接続している過程を論じているのだと考えた。